

受験番号		氏 名		クラス		出席番号	
------	--	-----	--	-----	--	------	--

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2014年度 第 2 回 全統マーク模試問題

国 語 (200点 80分)

2014年 8 月実施

注 意 事 項

- 1 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 2 この問題冊子は、46ページあります。問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。
- なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

問題を解く際には、「問題」冊子にも必ず自分の解答を記録し、試験終了後に配付される「学習の手引き」にそって自己採点し、再確認しなさい。



国

語

(
解答
番号

1

、

36

第1問

以下は、社会美学という考え方を述べている文章である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（設問の都合で本文の段落に1～12の番号を付してある。）（配点 50）

1 電車内での場面を想定してみよう。古稀^{（注）}を迎えるあなたは、車内で立っているのが辛くなった。斜め前に座っていた人が席を立ててあなたに座るよう促す。席を譲ってもらうことであなたに小さくも快感がもたらされた。それは座れて身体が楽になったという生理的快であろう。その時、この場面を見ていたわたしにも、少なからず快感がもたらされたとする。それは「席ゆずり」という道徳的な振る舞いに立ち会ったことによる観念的快である。反対に、誰にも席を譲ってもらえなかったあなたは生理的不快をおぼえ、そうした場面に立ち会ったわたしにも観念的不快がもたらされたかもしれない。

2 もう一つ、ショッピングモール内のオープンスペースを例にとろう。そこはベンチや^{（ア）}カンヨウ植物が配置されデザインが行き届いたフラットなバリアフリー空間になっている。足の不自由なあなたは段差や障害物に躓く^{（イ）}ことなく移動でき、どこにでも腰かけて身体を休めることができる。つまり、生理的快を得ることができる。この空間に立ち会ったわたしもまた、バリアフリーのフロアやベンチに道徳的配慮を読み取って観念的快をおぼえるだろう。反対に、通路には商品ワゴンや段ボールが乱雑に置かれ、いくつもの段差やタイルの剥がれた凹凸のある床面は生理的に不快であるだろう。そこに立ち会ったわたしもまた、配慮や手入れの不足を読み取り、観念的不快をおぼえるはずだ。

3 こうした事例において、生理感覚や観念は外界の何を捉えて私たちに快不快をもたらすのだろうか。また、感性はどのように働いて快不快をもよおすのだろうか。生理的、観念的、感性的という三つの快感の特性について、^A掘り下げて検討してみよう。

4 まず、生理感覚が捉えるのは、席ゆずりのおかげで「腰をおろせたこと」や、バリアフリーのおかげで「歩きやすいこと」といった、自己の身体生理に関わる刺激である。一般に、この刺激は動物的個体としての私たちの生命維持にとってプラスであれば快感をもたらし、マイナスであれば苦痛をもたらすといえる。生理感覚は、私的な個体を取りまく外部環境を危険なも

のと安全なものにより分け、それを快不快の感覚を通して知らせてくれる。その意味で、生理感覚の働きは私たちが個体中心のあるいは主観的に事物を認識するために欠かせないものである。生理感覚そのものは「席ゆずり」とか「バリアフリー」といった観念とは無縁であるが、そうした行動や環境が個体の安全にとって何を意味するか（危険かどうか）を捉えるのである。

5 観念もまた個々の行動や環境を切り取って捉えるが、その場合、ある行動が「席ゆずりである」とか、ある空間が「バリアフリーである」という読みとりを行う。一般に、この読みとりは制度化された社会通念に従ってなされる。そのため、その行動や環境が社会通念あるいは道徳観念に照らして適切ないし有価値であれば快をもたらし、そうでなければ不快をもたらず。

既成観念は、名もなき行動や環境に名前をつけ、あらゆる未知の物事を既知の物事に組み入れ、快不快の感覚を通してその是非善悪を告げてくれる。その意味で、観念の働きは私たちが制度中心のあるいは客観的に事物を認識するために不可欠である。

6 私たちは社会生活においてさまざまな人びとの行動やアーティファクト（人工物）に出会い、それらを生理感覚あるいは観念を通して捉えている。生理的な快不快をおぼえるとき、人びとの行動やアーティファクトは自分個人の身体にとって快適（きもちいい）かどうかが尺度となる。生理的な快不快はすぐれて私的なものである。他方、観念的な快不快をおぼえるとき、人びとの行動やアーティファクトは社会一般の通念に沿っているかどうか、道徳に適合しているかどうかが尺度となる。B 観

念的な快不快はすぐれて公的なものである。このように、生理感覚と観念は対立するようにみえるが、両者には大きな共通点がある。それは個々の行動やアーティファクトを対象化し、それを「何であるか」として認識する働きである。日常生活で出会うさまざまな物事は、一方では、生理感覚を通して「安全なもの／危険なもの」として対象化され、他方では、観念を通して社会通念上「適切なもの／不適切なもの」として対象化される。

7 それでも私たちは、身のまわりの物事を「何であるか」として認識するために、人びとの個々の行動やアーティファクトについて捉えているだけではない。ある行動は「席ゆずり」として捉えられるだけでなく、また、ある人工空間は「バリアフリー」として捉えられるだけではない。人びとの行動や人工空間は、「それは何であるか」として捉えられるだけでなく、「いかにあるか」「どのようにあるのか」という仕方でも捉えられることがある。

8 ある行動をめぐって「それは何か」と問われれば、「身体を楽にしてくれた行動」（生理感覚）とか「他者に席を譲った道德的行動」（観念）などと答えるだろう。しかしそれだけでなく、この行動を含む社会的状況の全体を「清々しい」とか「重々しい」などと表現したくなる場合がある。人工空間をめぐっても、「楽に歩ける空間」とか「バリアフリー」などというだけでなく、その場全体を「活き活きしている」「侘びしい」などと形容するのがふさわしい場合があるだろう。そこに捉えられているのは人びとの交わりの場が（イ）カモし出す雰囲気であり、場そのもののもつ手ざわりや表情であった。それは個々の行動や事物を対象化して生理感覚的に確認したり、観念的に解読したりするのではなく、状況や場の全体を感性的に味わうことによって可能になったのである。

9 感性の働きもまた独特の快不快をともなっている。私たちが相互行為状況としての席ゆずりに感性的な快不快をおぼえるのであれば、そこに生じた「清々しさ」が快をもたらすのであり、「重々しさ」が不快をもたらすのである。この時私たちが捉えているのは席をゆずる／ゆずられるという個々の行動ではなく、この相互行為状況そのものがカモし出す場の「清々しさ」あるいは「重々しさ」である。つまり、感性的快は個々人の行動を対象化するのではなく、人と人の交わりのうちに生起するその場その時の雰囲気味わうことによってもたらされる。同様に、バリアフリー空間に感性的な快不快をおぼえたとすれば、その場全体の「活き活きた雰囲気」に快をおぼえ、その「侘びしい雰囲気」に不快をおぼえているのである。

10 「清々しさ／重々しさ」や「活き活きた雰囲気／侘びしい雰囲気」は、少なからず生理感覚に関わるとしても、個体の生命維持につながる生理的快不快を決定するようなものではない。まして社会通念や道德につながる観念的快不快とはならん関係がない。個々の行動やアーティファクト（人工物）それ自体とは異なり、相互行為状況の全体はもっぱら感性によってこそ捉えられる。いいかえれば、社会生活における感性的な快不快は人びとの交わりの場のもつ手ざわりや表情、雰囲気を一挙に掴むことを通して体験されていくのである。

11 いうまでもなく、感性が捉えるのは人びとの交わりの場だけではない。絵画やチョウ（ウ）コク、写真や建築、（エ）トウキや掛け軸などの芸術作品は、たんに生理感覚的に反応したり観念的に解読するのではなく、感性的に味わわれるものの典型とみなさ

れている。現代アートは生理的な刺激の強烈さをアピールしたり、作者の意図を解説させる観念的な傾向が強いが、それでもなお感性の働きを促す典型的な領域である。すぐれた芸術では作品の目的意識は消え去り、あたかもそれ自体が目的であるかのように、作者による主観的な対象化からも鑑賞者による客観的な対象化からも逃れていく。それが「何であるか」はもはや問題ではなく、ただそれが「いかにあるか」だけが問題となる。私たちの目的意識をこえたところに感性的快としての芸術体験がもたらされるからである。こうしたC原型としての芸術体験は、物事そのものの味わいや質感を捉え続けようとする感性を活性化させていく。

12 D 社会美学が人と人の交わりのただなかに体験される感性的快に注目するのは、非日常的な芸術体験だけでなく日常の社会状況そのもののうちに、私的でも公的でもない、すぐれて共的な体験が潜在していると考えるからである。感性的な快不快をもたらす社会的状況が「いかにあるか」は、生理感覚や観念では捉えることができない。感性的快は個々の「私」が感じとるものでありながらも、その場を共有する他者との響き合いを通じて体験される。それは私的に所有されたり消費されたりすることはなく、また公的に管理されたり展示されたりすることもない。感性的快はその場その時に生まれたローカルな小社会によって(オ)キョウジュされるほかないという意味においても共的である。

(みやはらこうじろう ふじさかしんご)
宮原浩二郎・藤阪新吾『社会美学への招待』による)

(注) 古稀——七十歳の呼称。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

カンヨウ

1

- ① カンキユウ自在に操作する
- ② 天体カンソクをする
- ③ 筆跡をカンテイする
- ④ 病人をカンゴする
- ⑤ カンカツ官庁に出向く

(ウ)

チヨウコク

3

- ① 苦手科目をコクフクする
- ② 仕事で目をコクシする
- ③ 新たな規範をコクジする
- ④ コクビヤクを明らかにする
- ⑤ シンコクな事態に直面する

(オ)

キヨウジュ

5

- ① キヨウネン八十にして逝く
- ② キヨウヨウを身につける
- ③ 資源をキヨウキユウする
- ④ やむなくダキヨウする
- ⑤ ヨキヨウを楽しむ

(イ)

カモシ

2

- ① ジョウオンを保つ
- ② 田畑のドジョウを改良する
- ③ 酒をジョウゾウする
- ④ ジョウリュウ水を保存する
- ⑤ 汚染水をジョウカする

(エ)

トウキ

4

- ① 美しい調べにトウスイする
- ② トウトツな発言に驚く
- ③ 予算をトウケツする
- ④ 新政府の考えがシントウする
- ⑤ 伝統をトウシュウする

問2 傍線部A「掘り下げて検討してみよう」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の

うちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 生理的感覚にともなう道徳や社会通念に関わる観念が、他者の行動や外部環境に対する快感や不快感を生じさせ、それが自分の感性に痛切に訴えるということがわかるから。
- ② 他者のさまざまな行動や生活環境に対する好悪や快不快を含む感性的な受け止め方の背後には、生理的感覚と社会的通念や道徳に関わる観念が働いていることがわかるから。
- ③ 他者の行動や外的事象に向けられた感性的な快不快は、決して私的で主観的な感情ではなく、人間の生理的感覚に基づく公的で客観的な社会意識に規制されていることがわかるから。
- ④ 私的で主観的な生理的感覚と公的で客観的な社会通念に関する観念は、一見対立するように見えるが、実はこの両者が共鳴するような事象に感性的快感が得られることがわかるから。
- ⑤ 生理的快や観念的快は個々の行動や事象を対象化し認識することを通じて得られるが、感性的快は状況や場の雰囲気全体を一挙に掴み、それを味わうことで得られることがわかるから。

問3

傍線部B「観念的な快不快はすぐれて公的なものである。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7。

- ① 私たちはまず社会的感覚に基づいて外部環境が安全か危険かを判断するが、そうした判断の基準が観念として共有されることを通じて、社会的通念や道徳が形成され、快不快を含め日常生活の規範になるということ。
- ② 私たちは社会生活で接するさまざまな他者の行動や人工物に対して、主観的な生理感覚で快不快の判断をしがちになるが、社会一般の通念に即しているかどうかという客観的な基準で判断すべきだということ。
- ③ 私的で主観的な生理感覚と公的で客観的な社会や道徳に関する観念は、一見対立するように見えるが、どちらも社会生活で接する他者の行動や外部環境を、快不快という基準で判断する点で共通しているということ。
- ④ 私たちは社会生活において、さまざまな他者の行動や外部環境と接するが、それらが既成の倫理道徳や社会通念と整合性をもつかどうかという認知的な基準で、快感をおぼえたり不快になったりすること。
- ⑤ 社会生活における他者の行動や外部環境に対して、生命維持に関わる快不快を踏まえつつも、未知の物事を既知の枠組みに組み込むことで、社会的で客観的な認識に基づき対象の快不快を判断できるということ。

問4 傍線部C「原型としての芸術体験」とあるが、これについての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 芸術作品は本来、作者の表現意図や鑑賞者の認識的な評価を超えて、感性的な快感を味わわせるとともに鑑賞者の感性そのものをも活き活きとさせるものである。
- ② 現代アートにおける作品は、生理的な刺激の強さを強調したり作者の個性を際立たせたりすることで、鑑賞者に清々しさや活き活きした雰囲気味わわせるものである。
- ③ 芸術作品は、何をどのように表現しようとしたのかという作者の意図とは関わりなく、鑑賞者が自己固有の感性に従い味わうことを通じて、想像力を自由にはばたかせるものである。
- ④ 芸術作品はもともと、作者の表現意図を客観的に評価するといった特定の目的意識を超えて、鑑賞者が作品そのものを対象化し感性的な快を味わうものである。
- ⑤ 芸術作品は、作者が感性の赴くまま表現したものであれ、それぞれ固有の感性を備えた鑑賞者たちが相互に交わることで、統一された観念的な快が得られるものである。

問5

傍線部D「社会美学」とあるが、これはどのような考察をすることだと考えられるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 私的で主観的な生理感覚と、公的で客観的な社会に関する観念と、その両者を媒介する個々人の感性とが複合された観点で、他者の行動や外部環境について快不快という判断をする際の基準のありようを考察すること。
- ② 個々人の安全に関する生理感覚でも、社会通念に基づく観念でも捉えることのできない、具体的な場を共有する他者との響き合いを介して体験される感性的な快不快を通じて日常の社会的状況を考察すること。
- ③ 現代では、私的な生理感覚による判断も、公的な管理につながる社会通念による判断も、多様な生活をしている諸個人が共有できる認識とはなりえないが、芸術体験のように人間的な共感に根差して社会を考察すること。
- ④ 私的な生理感覚と社会通念との間には、目的意識の追求という点を除き大きな隔たりがあるが、その隔たりを媒介する感性の働きを通じて形成されるローカルで小規模な人間関係のありようを考察すること。
- ⑤ 本能に従う生理感覚も、人々を制度に組み入れる社会通念も、それぞれの存続をひたすら追求するという自己中心的な醜さがあるが、特定の目的とは無縁で各自の感性を充実させる人間関係の美しさを考察すること。

問6 この文章の表現と構成について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) この文章の表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

① 第2段落で「ショッピングモール内のオープンスペース」や「フラットなバリアフリー空間」など外来語を多用することで、新たな社会常識の必要性を暗示している。

② 「安全なもの／危険なもの」(第6段落)や「活き活きした雰囲気／怪しい雰囲気」(第10段落)の表現により、生理的であれ感性的であれ、快不快いずれの場合をも想定していることが読み取れる。

③ 第4、第5、第8、第9、第10、第12段落で、最後の文が「～である」という文末表現で終わることにより、それぞれの前に提示された疑問への解釈が明晰に示されている。

④ 「わたし」(第1段落)に対して「私たち」(第6段落)というように、一人称でも表記を使い分けることで、個人と集団とでは快不快の基準が異なることを強調している。

(ii) この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

① 第1段落～第2段落が前置き部分に相当し、第3段落～第10段落が中心部分となり、それに対して、第11段落～第12段落が補足部分という構成になっている。

② 第1段落～第3段落で事例紹介の後に問題が提起され、第4段落～第10段落で事例の分析がされ、第11段落～第12段落で筆者の主張が示されるという構成になっている。

③ 第1段落～第2段落、第3段落～第6段落、第7段落～第11段落、そして第12段落という四つの部分が起承転結という関係で結びつく構成になっている。

④ 第1段落～第5段落で事例とその社会常識的な分析が、第6段落～第9段落では学術的な分析が、第10段落～第12段落では芸術的な分析がされるという構成になっている。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第2問

次の文章は、南木佳士なぎけいしの小説「スイッチバック」の一節である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、本文の上の数字は行数を示す。（配点 50）

「私、もう限界みたい」

二月初旬の深夜、オムツを替え終えて二階の寝室に上ってきた妻はそう言ったまま蒲団ふとんもかけずにベッドに倒れ込んだ。

すぐに寝息が聞こえ出した。このままでは風邪をひくから、と起きて背をたたくと、驚くほどやせていて、背骨がくっきりと掌に触れた。

「たしかに限界だな」

暗闇で出てしまった声は、どこか他人のもののように回り道して耳に届いた。

夜が明けたら群馬の義母に電話することにした。四月まであずかる予定だったけれど、どうにも家族全員が疲れてきてしまってもうだめだ。これまで十数年介護してきたあなたは偉い。それがよく分かった冬だった。どうか父を引き取って欲しい、と。

出勤前に電話しようとしているところに、妻が奥の部屋から走ってきた。

「おじいさんが眠ったままで起きないのよ」

彼女の訴えに切迫感はなく、やれやれ、というふうに関を落としていた。

行ってみるとたしかに父は眠っていた。レースのカーテンを通したやわらかな朝陽が顔にかかり、これまでに見たことのない、微笑しているような、とても安らかな寝顔だった。

「いいよ。このままにしておこうや」

苦しそうならそれなりの処置を考えるべきなのだが、あまりにも気持ちよさそうな寝息が聞こえていたので妻にそう言った。

「このまま起きなかったらどうなるの」

妻の口調が主治医を問い詰める家族のそれに似てきた。

20

(ア) 誰も最終責任はとりたくないのである。そんなとき、ラグビーボールのようにパスされる「責任」を最後尾で受け止めるのも泥臭い臨床医の役目なのだと、いつの頃からか寂しく身に付けた性癖がある。

「いいよ、このままで。おれが責任をとるよ」

そう答えておきながらなにもしない。

こんな経験は医者になって二十年になろうとしているが初めてだった。

これが病院での出来事であつたら、眠ってしまった原因を探るために頭部のCTをはじめとするあらゆる検査を行ない、食べられないのだからと点滴を開始し、とにかくできるかぎりの医療行為をつくす。患者が死に至ったとき、やれるだけのことはやったのだとの勝手な満足感を家族と共有するためである。責められたときの(イ)担保でもある。

25

多くの場合、それらの処置で患者は延命する。しかし、すでに十分に看病疲れしている家族たちから感謝の言葉を聞くことはめったにない。

「あんとき、なんにもしなけりゃあ昔みてえに静かにおしまいだったでしょうかねえ」

30

ベッドの横に力なく坐り込んだ介護人の口から、どこかうらみがましい質問を受けるのも常であつた。なにもしない。

医師である長男がそう決めたのだから、文句を言う家族はいない。A 楽なようであり、すこぶるうしろめたくもあり、割り切れない気分のまま病院に出かけた。

35

夕方帰ると父はやはり眠ったままで、喉にいくら痰のからむ音がしていた。肺炎を起こしているらしかった。気管切開の適応かも知れない。だが、なにもしなかった。

このままでは数日で死ぬ。

医師としての確信を直接の介護者である妻に伝えると、ええ、そんなあ、と驚いたふりはしたものの、だからどうしろという回答はなかった。

翌朝、父の呼吸は浅くなってきた。

「群馬の家で死なせよう」

40 もう昨日から出ていた結論を口にしてしまうと、一気に体中が楽になった。

タクシー会社に電話して寝台車を頼んでから、群馬の家に連絡し、義母に、あなたが看取るのが最もふさわしいと思う、と告げると、彼女は、そうね、となにかを(ウ)ふんぎるように語尾に力を込めた。

妻が車で先導し、寝台車に寝かせた父の呼吸状態を監視しながら群馬に向かった。運転手がゆっくりと走らせてくれたので、軽井沢からの峠を越えて浅間山麓に出るまで一時間以上かかった。

45 「ほら、浅間だよ」

声をかけると、父は目を開き、左側の車窓を見上げた。

そこにはまだ五合目以上が白雪におおわれている浅間山の巨大な山体がそびえており、火口から澄んだ青空に向けて白煙が立ち昇っていた。

「帰ってきたんだよ」

50 再び呼びかけると、父は静かにうなずき、目を閉じた。

浅間山の裾野すそのに広がる山村を右側の車窓から見下ろしたとき、父は死に場所に帰ったのだな、としみじみ納得して、ふいに涙が湧いた。幼い頃から見慣れた浅間山を、父はもう二度と見ることはないのだな、と胸の内であらためて確認すると、涙の量が増した。

父の死に際し、泣いたのはこの浅間山の裾を走る直線道路の、ほんの十数秒の間だけであった。

群馬の家の駐車場には近所の老婆たちが出迎えており、

「まあ、よく面倒みたねえ」

とか、

「えらかったねえ」

と、妻にねぎらいの言葉をかけてくれた。

60 そこで一気に張りつめていたものが切れた。彼女はその場に泣き崩れてしまった。

父は二階のベッドに寝かされると目を開いた。

「どうだい。分かるかい」

と、集落の老人たちが声をかけるとはつきりとうなずいていた。

65 痰のからむ音は小さくなっていたが、義母がコップからストローで与えようとしたカルピスは飲めなかった。集まった老人たちは義母から危篤状態で連れかえされると聞いていたらしく、いくらか気の抜けた顔で父のベッドの横に車座になり、茶を飲み始めた。

「なあ、なあ、おらあ明日から一泊で伊豆に旅行に行くだが、この分だら大丈夫だんべなあ」

小声で念を押す老人に、大丈夫だと思えますよ、と笑いながら答えていたのだが、父は翌日の夜、死亡した。二月十四日であつた。

70 通夜の席でこの老人から、医者だからおめえの言うことを信じたのによお、とうらみごとを言われたが、父の死に関して医師としての責任を問われたのはこの一事だけだった。

長老たちの指示どおりに動いている間に葬儀も納骨も終わった。集落の人たちにとつても、十年以上寝たきりで人前に顔を出さなかった父は半ば以上死んだ存在だったので、まったく涙のない、祭りのような葬式であつた。手伝ってくれた人たちの労をねぎらう忌明けと呼ばれる宴会ではカラオケまで出て、

75 「いやあ、久しぶりにおもしろかった」

と、老人たちは満足の千鳥足で帰って行った。

五月の連休に妻や子供たちと父の墓参りをした。墓地は桜が満開だった。

もう三十年以上も前の話だが、この墓地のある斜面はスイッチバックと呼ばれており、村から山の上の温泉場に通ずる電車の線路が敷設されていた。アメリカで鉱山のトロッコを引いていた小さな電気機関車を輸入して用いており、一両か二両の客車や貨車を連結してゆつくりと走る森林鉄道のようなものだった。

広辞苑によればスイッチバックとは、折返し式の鉄道線路。急勾配の途中には停車場を設置できないため、列車は一旦、本線から分岐して設けたこの線路に入り、のち逆行して平坦地へいたんに設けられたプラットホームに導かれる、となっている。この説明も分かりにくい。要するに直線では登れない急勾配をジグザグに前進と後進を繰り返して登って行く仕組みである。

この軽便鉄道はただでさえ速度が遅かったのだが、スイッチバックに入るとまるで人が歩いているのとおなじくらいのスピードになってしまった。当時から線路の土手には桜の木が植えられていたので、花の季節になると窓から桜吹雪が舞い込み、モンシロチョウまでまぎれ込んできた。

結核療養所から仮退院していた実母と父と祖母に連れられ、五歳の姉とともに温泉に行ったのは二歳の春だった。もちろんそんな頃の記憶があるはずはなく、すべては母の死後、祖母から聞かされたものである。

一泊二日の温泉旅行。母はよく食べ、子供たちの手を引いて湯畑ゆばたけや旅館街を散歩し、よく眠った。まるで結核など治ってしまっただけのように元気だった、と祖母は話してくれた。

翌日、電車に乗って村に帰るときはすでに陽が暮れていた。スイッチバックにさしかかると、客車は機関車の明るいヘッドライトに浮かび上がった満開の桜のトンネルに入った。満員の乗客の顔が花の薄桃色の反射に染まり、ほんの一時だったが、なんだか別の世界に迷い込んだ気がした。

95

「来年はこの桜、見られないかも知れないねえ」

ぼつりとつぶやく母の声があまりにも弱くわしかった。

「なにばかなこと言ってるだ。二人の小せえ子を残して死ぬわけにゃあいくめえや」

90

85

80

祖母は向き合って坐る娘を現実の世界に連れもどすべく、その細い手を強く引いた。

生来体が丈夫で、女子師範学校を出て村の小学校の教師をしていた母が結核を発病したのは、父を婿に迎えて間もなくのことだった。その頃、父は胸郭成形の手術を受けた既往^(注)を有する結核患者だったのである。

温泉場への一泊旅行の話は、この平凡な一家がかろうじて成立していた最後の場面として何度も祖母の口から語られていた。しかし、旅館や桜のトンネルの中で父はどんなふうにしていたのか。うれしそうだったのか、つらそうだったのか。祖母はなにも伝えてはくれなかった。

「あの娘は結核になるようなやわな女じゃなかっただ」

晩年になってからも、祖母は言外に父への批判を込めてそう言い続けていた。

翌年の冬は寒く長く、群馬の山村の桜は五月に入っても咲かなかった。母は四月二十九日、遅すぎる雪の降る日に死んだ。スイッチバックでの予言はあたってしまったのだった。

昭和三十年代の半ばに鉄道が廃止され、線路も撤去されてしまった。四十年代に入って墓地として造成されてからも、スイッチバックの地名と桜はそのまま残され、春になると花見の人々でにぎわう。

父の墓参を終えたときも十組近い家族が桜の大木の下で弁当を広げていた。

この桜のトンネルの中をゆるやかに走る電車に乗っていた家族の内、まず母が死に、次いで祖母、そして父が死んだ。残っているのは姉と二人だけ。そう考えると、昭和二十八年の春、あの一両だけの客車に乗っていた満員の乗客たちの中で、いったい何人の人が生き残って今年の桜を見ているのだろうか。

これまで生きてきた四十数年の記憶のすべては、あの古風な電車がスイッチバックを往復する間の、ほんのわずかな時間に起こったささいな事件の集積のような気がしてならない。

「私さあ、なんだか申し訳ないんだけど、ほっとしてるのよ。この二カ月で三キロも太ってしまったものね」
墓の石段に腰をおろして妻が大きく胸を広げた。

「おじいさんてほんとに死んだんだって、最近やっと実感できるようになったよな。眠っちゃうまではしっかり食ってたもん
な」

中学三年になったばかりの次男は独り言をつぶやきながら墓の雑草を抜いていた。

「桜もすごいけど、タンポポもこれだけあるとすごいな」

高三の長男がふり返ったうしろの土手は一面タンポポの黄色で埋まっていた。

春であった。

あの日の電車の乗客たちはおおむね墓の下に移ってしまったのかも知れないが、ジグザグの地形をそのまま残すスイッチバックは当時とおなじ桜につつまれ、おそらくなにも変わってはいないのだった。

花の下で弁当を食っている家族たち。そして、こうして墓の前に坐っている我々。みんなが見えない電車に乗り合わせてゆつくりとスイッチバックを往復しているような、
C | そんな執拗じつような幻覚にとらわれ続けたうらかさすぎる春の午前であった。

(注) 既往——病歴。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 12 ～ 14。

- (ア) 泥臭い
- 12
- | | | | | |
|-------|-------|----------|--------|-----|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 目立たない | 地道に働く | 洗練されていない | 根底で支える | 陰気な |

- (イ) 担保
- 13
- | | | | | |
|-----------|---------|---------|----------|---------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 負担を軽くするもの | 仲間である根拠 | 言い逃れの手段 | やりすぎす手立て | 保証となるもの |

- (ウ) ふんぎるように
- 14
- | | | | | |
|---------|---------|------------|---------|----------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 決断するように | 拒絶するように | 未練を断ち切るように | 和解するように | あきらめるように |

問2

傍線部A「楽なようであり、すこぶるうしろめたくもあり、割り切れない気分」とあるが、このときの語り手の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

① 一刻を争うような重篤の昏睡状態に陥った父に対して、さまざまな検査を行うべきなのに、何の医療措置も施さないことを決断した。そうした自分の決断に対して、家族が表向き何の文句も言わないのはうれしいが、医師としてこれいいのかという良心の呵責も感じている。

② 瀕死の状況にある父に対して何の処置も施さないことを決意し、家族の非難に備えて、長い医師生活で初めて自分が責任をとることにした。その結果、非難を封じ込めることに成功したが、医師としてそうした責任を明言してよかったのかという後悔の念にも苛まれている。

③ 眠ったまま起きない父をそのままにしておくことについて、責任をとると言い切り、その判断を家族が誰も批判しなかった。そうしたことにほっとしつつも、医師として為すべきことをしていないのではないかという引け目も感じ、我ながら釈然としない思いに陥っている。

④ 安眠しているだけの父について騒ぎ立て、自分への不信感をあらわにする妻に辟易したため、何の処置も必要としないことを断言した。その結果、妻子が文句を言うこともなくなったので拍子抜けし、逆に医師として処置に誤りがなかったのか、少し不安になっている。

⑤ 何の処置もしなければあと数日の命であることが明らか父に対して、あえて何もしないことにした。その結果、医師としての職務を果たしていないという自責の念に駆られながらも、家族から非難されないのでもありがたいかとも思う、どこか曖昧で腑に落ちない気分を味わっている。

問3 傍線部B「彼女はその場に泣き崩れてしまった」とあるが、このときの妻の説明として最も適当なものを、次の①、

②のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 家族が疲れ果ててもなんとか自分一人で介護し続けて来た義父を、死ぬ前に何とか群馬の家まで連れて来ることできて安心したところで、老婆たちに優しい言葉をかけられ、こらえてきた感情が噴出してゐる。
- ② 容態が悪化した義父の介護を最期までやりとげたかったが、冷淡な夫の指示に逆らう気力もなく、渋々群馬の家に連れてきたところ、老婆たちから思いがけずいたわりの言葉をかけられ涙が止まらなくなっている。
- ③ 誰も面倒をみなかった義父を自分一人で介護し続けたことに關して、家族にすら感謝されたことがなかったのに、近所の老婆たちから思いがけないねぎらいの言葉をかけられ、感情を押さえられなくなっている。
- ④ 義父の介護に憔悴^{しやうすい}しきっていたところで、容態が悪化した義父を群馬の家まで先導して来たが、近所の老婆たちにこれまでの労をなぐさめられたため、今までの辛さがこみあげ、人目をはばかり泣いている。
- ⑤ 時に虚脱感を自覚しながらも、精一杯義父の介護をしてきたつもりだが、老人たちの賞賛の言葉を聞くと、かえって自分の介護の至らなさへの後悔の念がこみあげてきて、平静さを失っている。

問4

本文55行目～123行目で、語り手の父をめぐり、集落の老人たちと墓参りに来た家族の言動はどのように描かれているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 老人たちは長らく寝たきりになって逝った父の葬式を手伝い、それを賑やかなものにした。一方、家族は介護から解放され、墓参りで父の死を過去のこととして振り返り、のどかな光景の中で安らぎを味わっている。
- ② 老人たちは父への供養とばかりに悲しい気持ちを押し隠して明るく振る舞っていた。一方、家族も墓参りの際、父の死を哀悼する悲しい気持ちを押し隠して、つとめて明るく父の介護の日々を回想している。
- ③ 老人たちは意識のはっきりしていた父が急死したことに狼狽し、それを隠すために祭りのような葬式を演出した。一方、家族はうらかな春の日に、父の死から解放された明るい気分を隠すことなく、くつろいでいる。
- ④ 老人たちは父の葬式の采配を揮い、一連の行事を楽しみ満足して帰って行った。一方、家族は墓参りの日に、生命力溢れる春の光景に触れて、父の死によって生じた深い心の傷を癒そうとしている。
- ⑤ 老人たちは、十年以上寝たきりの父を半ば以上死んだ存在として扱ってきたため、父の死を気にかけることもなく、葬式を宴会にしまった。一方、家族は父の死を実感しつつ介護からの解放感に浸っている。

問5 傍線部C「そんな執拗な幻覚」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答

番号は 18。

- ① 鉄道がなくなり線路だけ残ったスイッチバックだが、幼い日の温泉旅行の帰りに、そこをゆつくりと走る電車から一家で満開の桜を眺めたように、今でも電車が行き来して、花見をする人々の一生を運び、それを見守り続けているような夢想が生じるということ。
- ② 電車の通っていた斜面が墓地になっても、人々が毎年花見に訪れるように、人の一生はスイッチバックの電車のように同じ出来事のくりかえしであり、今でも人々が電車に乗り合わせて同じ場所を往復しているだけのような夢幻的な感覚が生じるということ。
- ③ 今でも桜の季節になると、多くの人々がスイッチバックを訪れて花見に興じているが、ここはかつて母の死が予言され、今では墓地に造成されている不吉な場所であり、訪れた人々が見えない電車に運ばれて死に向かっていくようなおぞましい幻覚が生じるということ。
- ④ のどかな桜の季節に人々がゆつくりと花見をしているさまが、かつて電車が速度を落としてスイッチバックを往復していた頃ののどかさと通じあい、花見の人々がいまだに電車に揺られてスイッチバックを往復しているかのような錯覚が生じるということ。
- ⑤ 鉄道が動いていた頃の地形を残すスイッチバックが満開の桜に包まれる光景を見ると、今もなおスイッチバックをゆるやかに走る電車に人々が乗り合わせており、その電車が往復しているうちに各々の人生の時間が過ぎ去っていくような幻想が生じるということ。

問6

この文章は、第一場面（1行～76行）と、第二場面（78行～127行）の二つに分けられる。二つの場面の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

19

20

。

- ① 第一場面での語り手と妻の会話は、常に妻からの語りかけで始まっている。これは、父の介護に関して語り手が消極的であることを示している。
- ② 第一場面25行目までに「責任」という言葉が三回出てくる。そこでは「責任」のあり方を直喩を交えて表現するなど、語り手の医師としての責任が、父の死に関してもついて回るさまが印象づけられている。
- ③ 第一場面で、集落の老婆たちが標準語で語るのに対して、語り手にうらみごとを言う老人は方言で語っている。これは、老人と老婆たちの間に確執が生じていることを暗示している。
- ④ 第二場面では「広辞苑によれば」とスイッチバックの辞書の意味を引用している。この引用には、スイッチバックという実在しない線路の形態に、あたかも実在するかのような真実味をもたせる効果がある。
- ⑤ 第二場面94行目の「別の世界に迷い込んだ気がした」という表現は、桜の咲き乱れた見事な光景が、娘をこの世からあの世へと誘おうとするかのような光景でもあったという印象を、祖母に残したことを物語っている。
- ⑥ 第二場面101行目に「かろうじて成立していた最後の場面」という表現がある。これは、婿でありながらのちに再婚して家を出ることになる父と母と祖母と語り手の四人の生活のほかなさを物語るものである。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第3問

次の文章は『夜寝覚物語』^{よるのねざめ}の一節である。女君は、夫の大將が結婚前から女君の妹を深く恋慕していることを知り、衝撃を受ける。大將はそれを否定するが、女君は、長い間大將に心を許せず、妹とも疎遠になっていた。そのような折、大將が皇女と結婚するという話が持ち上がる。以下は、その話を聞いた女君が、いっそう物思いに沈む場面から始まる。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

女君はいとよく伝へ聞きて、人笑はれならんことを思し沈むに、とかく慰め聞こえ給ふに、年ごろは数ならぬ身を恨みつづ過ぐす中にも、ありありて、^(注2)たち勝りたるさまに思ひ寄り給ふことの恨めしくて、つゆも慰む御心なし。

あはれなる秋の夕べの、入り日かげろふ御前の前裁、^(注1)常よりもおもしろう見ゆるに、^(注3)端近うゐざり出で給ひて、わが御有様の心細くて、何の草葉も御目のみとどまりてあはれなれば、琵琶を掻き鳴らし給ふに、いにしへ、関白殿の北の方と、かやうなる夕べ遊びし折々の、^(注4)箏の琴恋しう、ただ今の心地して、何とて年ごろあいなきことどもに隔たりけんと、向かひ聞こえて見奉らばはづかしさも紛れなんかしと、^Xくやくしく思し出づれば、^(注5)童のをかしきを下ろし給ひて、なべてならぬ枝を折ら^bせて、奉れ給ふ。

A もろともにあり経し宿は変はらねど花は見し世のほひやはある

なほ琵琶を掻き鳴らしてながめ居給へるに、大將殿おはして、例ならぬ端近き御気配のめづらかにて、御側に居給へれば、琵琶も弾きさしてゐざり入り給へるを、「あな心憂^{こころづ}。などか尽きせず許しなき御けしきならん」とて、引きとどめ給ひて、われも琵琶を弾き給ひて見奉り給ふに、濃き御衣、^(注6)龍胆の織物の小桂着給ひて、^(ア)いといたう悩み瘦せ給へるに、額髪のうちかかりたるが清げなるを、常よりもまぼり給ひて、関白殿の北の方を思ひ比べざらん人は、これをこそ^(注7)限りなく思ひかしづかめ。なつかしきところだに添ひたらましかば、と見給ふ。琵琶を押しやりて添ひ臥し給ふに、世に解けがたき御けしき、さまさまに恨み給ひてちぎり慰め給ふに、女君さのみも心強からぬを、あはれに思す。かかるにつけても、^(注8)及びなきことに定まり給ひ^cなば、見る目も難くこそなど思し続けて、いと嘆かしげなるを、慰め給ひて、大將、

B 言に出でて言へばあだなり今思へつらき心の隔てありやと

とのたまへば、女君、

C 絶えぬべきちぎりにかへて惜しからぬ命を今日に限らましかば

とて背き給ふを、「あなゆゆし。^(イ)なげの言の葉も、身に沁むばかりもあるかな。ひとへにおろかに思ひ聞こゆるにはあらぬを、罪深くあさましくも思しなしたるかな」と、恨み聞こえ給ふほどに、ありつる御返り、持ちて参りたり。白き唐の色紙に立文なり。^(注5)「殿の御返事か」とて、取りて引き広げ給へば、ただ今は分くる心もなかり^(注6)しに、胸うち騒ぎて見給へば、^(ウ)「これより聞こえさせばやと思ふ折しも、同じ御心にさへ」とて、

「D 花盛りともにながめし古里の庭をばつゆも忘れやはする

このほどなども参りたきながら、何となう紛れて」

など、ゆるゆると書かれたる、限りなくにはひありてうつくしきに、心のうちはせきかね給へど、紛らはし給ふに、けしきも変はりやすらんとそぞろはしき心地して、^Y押しやりつつそのまま臥し給へるに、女君も見給ひてうち泣き給ふけしき、いみじく心置き給ひし名残なく、あはれにおぼえ給ふ。

(注) 1 とかく慰め聞こえ給ふ——大將が、皇女との結婚について、女君を慰めている様子をいう。

2 たち勝りたるさまに思ひ寄り給ふこと——大將が、女君よりも身分の高い皇女に心惹かれていること。

3 関白殿の北の方——女君の妹。このときは、関白の妻となっている。

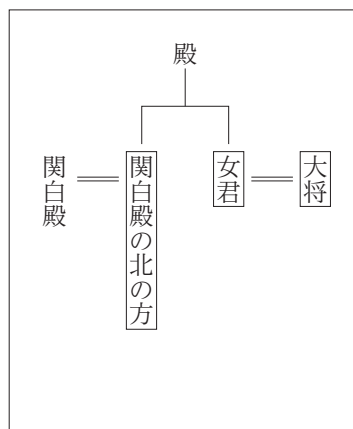
4 及びなきこと——女君には及びもつかないこと、の意で、大將と皇女との結婚を指す。

5 殿——女君と関白殿の北の方の父。

6 分くる心——他の女性に愛情を分け与えようとする心。

人物関係図

主要登場人物は□で囲んだ。
で囲んだ。



問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

23

。

(ア)

限りなく思ひかしづかめ

21

- ① とてもすばらしく感じて自慢するはずだ
- ② この上なく心にかけて大切に世話するだろう
- ③ はなはだ美しい人だと思って喜ぶだろう
- ④ 最高だと思いがめるにちがいない
- ⑤ またとなく大切に育てていけばよい

(イ)

なげの言の葉

22

- ① 心のこもった言葉
- ② 残酷な言葉
- ③ 恐ろしい言葉
- ④ すばらしい言葉
- ⑤ ちよつとした言葉

(ウ)

これより聞こえさせばや

23

- ① 私からお便りしたい
- ② こちらから伺えたら
- ③ 今からお会いしたい
- ④ こちらから聞かせよう
- ⑤ 私から話しましょう

問2

波線部 **a** と **d** の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

24

- | | | | | | | | | |
|---|----------|---------|----------|--------|----------|--------|----------|----------|
| ① | a | 過去の助動詞 | b | 尊敬の助動詞 | c | 断定の助動詞 | d | 過去の助動詞 |
| ② | a | 動詞の活用語尾 | b | 使役の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 過去の助動詞 |
| ③ | a | 過去の助動詞 | b | 使役の助動詞 | c | 断定の助動詞 | d | 形容詞の活用語尾 |
| ④ | a | 動詞の活用語尾 | b | 尊敬の助動詞 | c | 断定の助動詞 | d | 過去の助動詞 |
| ⑤ | a | 動詞の活用語尾 | b | 使役の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 形容詞の活用語尾 |

問3 傍線部X「くやしく思し出づれば」とあるが、この時の女君の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

25。

- ① 秋の夕暮れの情趣に触発されて、かつて同じような風情の夕暮れに一緒に琴を奏でた妹を恋しく思い出し、今まで距離を置いてきたが、一度でも会っていたならば互いにわかり合えただろうに、と残念に思っている。
- ② 自分に対する大将の愛情を信じることができず、不安にかられる今、肉親である妹のことが懐かしく思い出され、自分と妹を引き離す原因を作った大将とどうして結婚してしまったのだろうか、と後悔している。
- ③ 自らの境遇を頼りなく感じる折、妹と過ごした昔のことを恋しく思い出し、どうしてつまらないことで妹を遠ざけたのか、顔を見ればきまり悪さも忘れられるだろうに、と今までの妹への態度を悔やんでいる。
- ④ 色あせていく草葉が、自らの妻としての立場の変化と重ね合わされ、妹ならこのつらさを察してくれるだろう、と思うが、むやみに冷たくしたのは自分なのだから、今さら声をかけるのも気がひける、と躊躇ちゅうちよしている。
- ⑤ 皇女に妻の座を追われる自らのほかない立場を痛感しつつ、関白の妻として何の心配もなく暮らしている妹をうらやましく思い、どうして自分は妹とこんなに違う境遇になってしまったのか、と悔しく思っている。

問4

AとDの和歌についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

① Aは女君が妹に対して、昔のように仲のよい姉妹でなくなったことを悲しく思う、と詠みつつ、暗に妹との和解を望む気持ちを伝えている。Dは妹が女君に対して、故郷とともに花を眺めた日のことを、あなたは忘れないでいてくれたのだなあ、と詠んでいる。

② Aは女君が妹に対して、かつてともに花を楽しんだ家はもはや荒れ果ててしまい、私も昔とはすっかり変わってしまった、と嘆いている。Dは妹が女君に対して、あなたのことを忘れられず、その悲しみを思うと私は露のような涙を流してしまう、と詠んでいる。

③ Aは女君が父に対して、家族で過ごした家は昔のままなのに、花が散るように皆が私から離れて行った、と憂えている。Dは妹が父に成り代わり女君に対して、美しい花を皆で見たことを私も覚えていし、いつかは家族も再会できるだろう、と詠んでいる。

④ BとCは大将と女君との贈答歌で、Bでは大将が、私にあなたを隔てようとする薄情な心などないことをわかってほしい、と強く訴えている。Cでは女君が、私とあなたとの仲が終わってしまうぐらいなら、私の命が今日絶えてしまえばよかったのに、と詠んでいる。

⑤ BとCは大将と女君との贈答歌で、Bでは大将が、皇女を妻として迎える私を、あなたは隔てなく愛してくれるだろうか、と問い掛けている。Cでは女君が、もし私が死ねば二人の仲は絶えるだろうが、これからも生きるのだからあなたを愛し続けたい、と詠んでいる。

問5 傍線部Y「押しやりつつそのまま臥し給へるに」とあるが、大将がこのような態度をとった理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

- ① 女君の妹が書いた手紙を思いがけず見て、妹へのあふれる思いを何とか抑えてごまかすものの、顔色は変わっていないだろうか、それを女君に気づかれはしないだろうかと不安になったから。
- ② 女君の父からだと思った手紙が、女君の妹からのものだとはわかったため、思わず手に取ったが、ここで女君の機嫌をそこねるわけにもいかず、誰からの手紙かわからないふりをしようと思ったから。
- ③ 女君の妹が書いたものを見て、その筆跡の見事さに思わず感嘆の声をあげてしまったが、何事においても妹に引け目を感じている女君を悲しませないために、何気ない様に取り繕おうとしたから。
- ④ 女君の妹の手紙を見ながら、あらためて妹への恋心がわきおこったが、妹は関白の妻となっており、自分に対する気持ちも、今はもう変わってしまったているのだろうか、悲しく思ったから。
- ⑤ たった今女君をいとおしく感じたばかりなのに、女君の妹の手紙を目にしたとたん、すぐさま自分の気持ちが妹の方へ向いてしまったことが我ながら情けなく、女君に顔向けできないと思ったから。

問6

この文章の表現と内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

28。

- ① 女君の自らを卑下する性格が、「とにかく慰め聞こえ給ふ」「御側に居給へれば」という、女君に積極的に好意を示そうとする大将の言動に接しても、「数ならぬ身を恨みつつ過ぐす」「琵琶も弾きさしてゐざり入り給へる」などと、かえって自らを貶める^{おとし}ありさまを描くことで、巧みに示されている。
- ② 大将の不実な姿が、「琵琶を押しやりて添ひ臥し給ふに、世に解けがたき御けしき」というように、女君の視点から描かれることで、大将が女君に対して「罪深くあさましくも思しなしたるかな」と恨み言を言いつつ誠意を示そうとしても、それが女君の心に届くはずがないことが強調されている。
- ③ 女君のかたくなな態度が、「なかみ尽きせず許しなき御けしきならん」という大将の言葉によって示される一方で、大将が「ちぎり慰め」ることで、女君の心が「さのみも心強からぬ」ようであったり、大将に会えなくなってしまう。「いと嘆かしげなる」ようであったりと、さまざまに揺れ動く様子が表現されている。
- ④ 大将の冷酷な人柄が、自分のせいで「ながめ居給へる」「いといたう悩み瘦せ給へる」女君に対し、表面上は「常よりもまぼり給ひて」と優しい態度を装っているものの、心の中では「なつかしきところだに添ひたらましかば」と容赦なく突き放している様子を描くことで、浮き彫りにされている。
- ⑤ 妹の細やかな心遣いが、「ありつる御返り」をすぐさま送ってきたり、手紙に「白き唐の色紙」といった美しい紙を使ったりする行為に表されているが、その手紙を「見給ひてうち泣き給ふ」女君の様子を描くことで、妹に対する「いみじく心置き給ひし」わだかまりがまだ解消されずにいることが印象づけられている。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第4問

次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）
（配点 50）

李君^{（注1）}一初序^{（注2）}王養蒙之^{（注3）}為^{（注4）}医、且美其不^{（注5）}屑^{（注6）}為^{（注7）}吏。予独謂此無足
怪者。虎豹鷹鷂、日殺^{（注8）}物以養^{（注9）}其軀、至^{（注10）}死^{（注11）}不^{（注12）}厭^{（注13）}。騶虞視^{（注14）}生草而不^{（注15）}
折、見^{（注16）}生虫而不^{（注17）}踐^{（注18）}。其嗜好不同、出於天性。易^{（注19）}之則兩^{（注20）}死、物理^{（注21）}
然也。何^{（注22）}独疑^{（注23）}於人哉。故吏与^{（注24）}医為^{（注25）}二道。活^{（注26）}人以^{（注27）}為^{（注28）}功者、**I**之道
也。其心慈^{（注29）}以恕^{（注30）}而仁者好^{（注31）}之。利己而無^{（注32）}恤^{（注33）}乎人者、**II**之道也。其
心忍^{（注34）}以刻^{（注35）}而不仁者好^{（注36）}之。故以^{（注37）}吏之心^{（注38）}為^{（注39）} **III**者、業必喪^{（注40）}。以^{（注41）}医之
心^{（注42）}為^{（注43）} **IV**者、身必窮^{（注44）}。又何怪^{（注45）}乎善^{（注46）}医者之不^{（注47）}屑^{（注48）}為^{（注49）}吏也哉。雖^{（注50）}然、今之
以^{（注51）}医道^{（注52）}為^{（注53）}吏者、未^{（注54）}見^{（注55）}也、而以^{（注56）}吏道^{（注57）}為^{（注58）}医則有^{（注59）}矣。**E**然則養蒙賢乎哉。

(注)

- 1 李君——人名。王養蒙の詩文集に序文を書いた。
- 2 王養蒙——人名。
- 3 鷗——ハヤブサ。
- 4 騶虞——虎に似た靈獸。聖人の徳に应じて現れるとされる。
- 5 恕——人に思いやりがある。
- 6 刻——無慈悲である。

(劉基^{りゆうき}『誠意伯劉文成公文集』^{せい い はくりゆうぶんせいこうぶんしゅう}による)

問1

傍線部(1)「厭」・(2)「忍」の
解答番号は

29

30

の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(1)

29 「厭」

- ⑤ 満足する
④ 服従する
③ 執着する
② 反省する
① 幻滅する

(2)

30 「忍」

- ⑤ 強い
④ 優しい
③ むごい
② したたか
① おだやか

問2 傍線部A「予独謂此無足怪者」の返り点の付け方とその読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 予独謂此無_レ足怪者
- ② 予独^{われ}謂^{おも}へらく此の足る無きは怪しき者なりと
予独謂此無_レ足_二怪者_一
- ③ 予独謂此無_レ足怪者
- ④ 予独謂此無_二足怪者_一
予独^{われ}謂^{おも}へらく此れ足るを怪しむ者無かれと
- ⑤ 予独謂此無_二足怪者_一
予独^{われ}謂^{おも}へらく此れ怪しむに足る者無しと

問3

傍線部B「易_レ之則_レ兩死」とあるがどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

32。

- ① 「虎豹鷹鷂」に好きなだけ生き物を殺させたなら、「虎豹鷹鷂」も獲物となる生き物も死に絶えてしまうということ。
- ② 「虎豹鷹鷂」と「騶虞」は異なる生き物であり、同じ環境のもとでは共に生きていくことはできないということ。
- ③ 「虎豹鷹鷂」に生き物を殺させず、「騶虞」に生き物を殺させたならば、どちらも生きていけないということ。
- ④ 「騶虞」に絶えず草や虫を食べさせたなら、草や虫が死に絶えるばかりか、「騶虞」自身も死んでしまうということ。
- ⑤ 生き物を殺す「虎豹鷹鷂」と、草や虫の命にも気を遣う「騶虞」を争わせたら、どちらも死んでしまうということ。

問4

傍線部C「何独疑_ニ於_一人_ニ哉」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

33。

- ① 何をか独り人に疑ひあるや
- ② 何をか独り人よりも疑はんや
- ③ 何ぞ独り人のみに疑はれんや
- ④ 何ぞ独り人のみに疑ひあらんや
- ⑤ 何ぞ独り人を疑ふのみなるや

問5 空欄 I・II・III・IV に入る語の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は 34。

⑤	④	③	②	①
I	I	I	I	I
医	吏	医	吏	医
II	II	II	II	II
医	医	吏	医	吏
III	III	III	III	III
吏 _ト	吏 _ト	医 _ト	医 _ト	吏 _ト
IV	IV	IV	IV	IV
吏 _ト	医 _ト	吏 _ト	吏 _ト	医 _ト

問6 傍線部 D 「又何怪_ニ乎善_レ医者之不_レ屑_レ為_レ吏也哉」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は 35。

- ① どうして「医之心」を持つ者は役人の仕事に向いていないのか
- ② どうして「医之心」を持つ者が役人の仕事をやりたいと思うのか
- ③ 「医之心」を持つ者の素晴らしさを役人は理解しようとはしない
- ④ 「医之心」を持つ者が役人になりたがらないのは当然である
- ⑤ 「医之心」を持つ者は役人の仕事に憧れを抱かないはずはない

問7

傍線部E「然則養蒙賢乎哉」の読み方と筆者の主張の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① この文は、「然らば則ち養蒙は賢なるか」と訓読し、「そうであるなら、養蒙は賢者であろうか」と述べる筆者は、自分の優れた能力を役人としての仕事には決して活かそうとしなかった王養蒙の生き方に疑問を抱いている。
- ② この文は、「然らば則ち養蒙は賢なるかな」と訓読し、「そうであるなら、なんと養蒙は賢者であることよ」と述べる筆者は、役人の道を選ばず医者^{いしや}の道を選んだ王養蒙は自分の天性をわきまえた人物であると高く評価している。
- ③ この文は、「然らば則ち養蒙は賢ならんや」と訓読し、「そうであるなら、養蒙は賢者ではない」と述べる筆者は、役人にふさわしい天性を持ちながらも医者^{いしや}の道を選んでしまった王養蒙を愚かな人物であると批判している。
- ④ この文は、「然れども則ち養蒙は賢なるかな」と訓読し、「そうだとすると、なんと養蒙は賢者であることよ」と述べる筆者は、自分の天性を役人としては活かせなかったものの素晴らしい医者^{いしや}になったと王養蒙を褒め讃^{たた}えている。
- ⑤ この文は、「然れども則ち養蒙は賢ならんや」と訓読し、「そうだとすると、養蒙は賢者ではない」と述べる筆者は、医者として成功を収めていながら役人の仕事に手を出して失敗してしまった王養蒙のことを残念に思っている。

